

# エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 5 9 号

2023 年 11 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「ガラテヤ人への手紙講解説教」より (4)

## キリストが、私のうちに生きておられる

前回学びました第 2 章 15-21 節につき、もう一度申し上げたい。この場所は、即ち、ガラテヤ書全体の要約並びに新・旧約聖書の要約と言っても差し支えない場所であるということを申し上げました。この場所を展開しているのがガラテヤ書であります。これからずっとこの場所を学ぶわけであります。

特に第 2 章の 19, 20 節「わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのはもはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉に有って生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって生きているのである。」

これが要約でありまして、これに我々の信仰は帰しているのであります。パ

ウロの書簡では、他の書簡では言っていないという場所があり、この箇所もパウロの数多くの書簡でどこにも言っておらず、ここだけで言っている言葉であります。それは、パウロの信仰を多く表わしている場所でありますので、これを解するためには、パウロの書簡全体をよく知っておかなければならない、という特徴を持っております。

## パウロの信仰

この2節〔ガラテヤ書第2章19.20節〕は、過去、現在、未来と、救いの3段階を述べています。即ち、19節の「わたしはキリストと共に十字架につけられた」、これは過去、入信した時であります。十字架の贖いによって、自分は死んで、そして神の子とせられた。これは、信仰に入った時の経験であります。

それから、20節の始め「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」は、未来。即ち、自分が生きているのはキリスト再臨の時に、自分は復活して、そしてキリストと同じ復活体を頂く、と。キリスト自身を頂く。これは復活の時の理想の状態であります。

その次、「しかし、わたしが今肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身を捧げられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。」これは現在。即ち、現在、肉によって生きているのは、自分の道徳、自分の信仰、自分の善き業、そういうものによって生きているのではなく、イエスが自分のために死んで下さった、その贖いを信じて生きている、という。これがパウロの信仰であります。誠にキリスト教の信仰を端的に言い現した場所であります。我々は、こういう信仰を学ぶ必要があります。

## パウロの福音は、十字架によるイエスの贖い

「福音の内容」というものは、イエス・キリストが十字架につけられて、復活し給うたことでもあります。これが福音の内容であります。イエス・キリストが十字架について、我々の罪とがを贖い、我々を神の子として、永遠の生命を与えて下さった。これは、イエスが復活し給うたことによって明らかとなった。十字架につけられた、復活された、ということがパウロの福音の全部であります。これを、ガラテヤ人は、始め信じたが、ユダヤ教の信者が来て、それだけでは不十分であり、ユダヤの律法を守ること、特に、割礼を受ける必要があると言ったために、彼らは十字架から離れて、他の方、律法の方に移りかける状態にありました。…

パウロのいう福音は、十字架につけられたイエスということだけであります。パウロの信仰は、十字架の贖いであります。十字架の贖いと言うことは簡単でありますし、ちょっと無意味のようであるし、これは魅力がありません。…ユダヤ人は、宗教の専門家ですから、神の力によって、偉大な行ない、善行をなすことが魅力でした。ところが、パウロの福音は、十字架によるイエスの贖いを説きました。イエスの贖い、イエスが我々の罪とがを贖って、我々に永遠の生命を与えたということを説く。

## 私もこの福音を宣べ伝える

私もこの福音を宣べております。…我々はむしろ、この世のことに魅力があります。青年にとっては、入学式が最も最も魅力でしょう。我々のような老人でも、もっと直接関係のある目に見えるもの、ギリシア人の如き哲学、学問、ユダヤ人の言うしるし、善行など、これらに魅力を感じています。私の話は高校生にとって魅力のないことは十分知っています。しかし私は、十字架につかれたイエスの話しをしております。ここでお話しすることと同じ話をしていきます。もし、1万人の高校生がおり、そのうち9999人が信じなくとも、一人、この十字架の贖いを信じる人があったならば、私の高校生会は十分であると思っています。また、この教会においても、聞く人がだんだん少なくなったならば、私はまた元の牧師館の6畳間に戻って伝道したいと思っています。初めから、この福音の話は、諸君に魅力のあるものではありません。ガラテヤの信者は、ユダヤ人から信者に魅力のある話を聞いて、動揺しました。

キリスト教で救われるということは、神の子とせられること

「聖霊を受ける」とはどういうことか。聖霊を受けたら、イエスを主と言い、救い主であることが分かり、イエスの贖いが分かり、そして、自分の罪が許されて神の子とせられて、永遠の生命（いのち）が与えられたということが分かる。聖霊を受けるという内容は、救われるということでもあります。キリスト教で救われるということは、神の子とせられることでもあります。神の子とせられるというのは、永遠の生命を与えられたということです。…

信仰というものは、他人に当てはめては、死ぬまで聞いていても分かりません。自分に当てはめる。福音の内容は十字架の贖いです。我々罪あるものを義とし、神の子として永遠の生命を与える、というのが福音です。福音とは、向こうから下さるものであります。これがキリスト教の中心であります。こちらの人間が行うもの、自分を愛するように隣人を愛し、父母を敬い、善い行いをする、と言うのが律法であります。律法・道徳と言うものは要求、命令であります。しかし、福音の内容は与えられているものです。このことをはっきりしておいてください。これはルッターの説明です。キリスト教信仰と言って、何を信じているかが分からなければ駄目です。

キリスト教の信仰の内容は、この贖いを信じることであります。これで救われる。他の信仰では救われません。信仰にもいろいろあります。しかし、救われる信仰というものは、イエスキリストの贖いを信じることであります。

聖霊が我々に臨んで、我々に神の子たるの信仰が与えられる

我々は信仰を賜り、聖霊を賜わっています。我々の信仰とは聖霊です。この信仰というものは不思議です。人間には信仰は欲しくありません。この世のものが欲しい。しかし、信仰が与えられるということは、聖霊が我々に臨んで、我々に神の子たるの信仰が与えられる。聖霊です。これは。信者と言うものは奇蹟です。さらにはないのが当然のことです。肉は悪いものではありません。しかし、信仰は、人間の理性、知恵、学問、などの人間の肉によってはいない。聖霊によっています。

何回繰り返しても同じことですが、要するに、本日の場所は5節〔ガラテヤ書3・1-5〕から成っていますが、律法と福音の差異がよく書かれています。道徳というものは、あれをしろ、これをしろ、と命令しています。福音、永遠の生命とは与えられるものである。そして、この永遠の生命を与えられて、我々は少しく律法を行なうものとなる。その力が与えられる。

## 第1の感想——善行の平面と信仰の平面とは違う

「律法と福音」であります。内村先生によりますと、宗教には2種類あるという。一つは、人が神を求めるといふ宗教。善行をなし、信仰を持って、研究し、努力し、そして神を求め。もう一つは、神の方から人間に下って、救いを得させて、そして人間に信仰を与えてくれるものであります。即ち、宗教には、自力と他力の二つがある、と。先生はガラテヤ書を当てはめてみるがよいと言われました。自分の手、自分の頭脳、自分の心の状態によったもの、これを自力と言います。そういうものを振り回していたら、永遠の生命は臨みません。これは理論ではなく、我々の実験によって分かる、という。即ち、十字架の贖いに留まっている時に、我々に聖霊が降る。その時、自分に復活の望みが起こり、永遠の生命を持っていることがはっきりして来る、という。十字架を仰ぎ見ること、これから離れることは墮落です。善行はよいが、それを救いの条件として持ち出すときに、それは墮落である、と言う。善行の平面と信仰の平面とは違っています。信仰の平面は、永遠の生命、善行の平面はこの世の生活理念です。

## 第 2 の感想——信仰だけで救われる

ロマ書 3 章の「人が救われるのは、律法、善行によらない」という事であり  
ます。ルッターはこれを訳して、「信仰のみによる」と言いました。カトリック  
の人びとは、これを誤訳であると責めますけれども、これは誤訳ではない。ガ  
ラテヤ書を見たらならば、善行によらず、信仰だけで救われる、とはっきり書  
いてある。

## 死に打ち勝つための力はどこにあるか——福音にある

一昨日の航空機の事故のことです。ちょうど7時頃、石館悌二夫妻が沖縄から羽田に帰ってきた時刻でした。北から来る飛行機と南から来る飛行機と同時であったのでしょう。私は石館兄弟とともに、夫妻の無事帰還を祝って、食事を共にしました。楽しい喜びの一方で、事故によって、百数十人の方がお亡くなりになりました。こういう危険は我々にいつでもあり得ることです。聖書には、先ほど金子兄弟が読まれたように、「汝今日魂を取られんことあるべし」とあります。いつこういうことが起こるか分かりません。石館兄弟に聞けば一番わかることですが、癌という病気も誰に起こるか分かりません。年寄りだけではない。この間、1月2日に、私がいつも行っている千葉の志津の佐藤兄弟が来られました。彼のご令兄が35歳の時、胃がんで亡くなられたそうです。35歳だから癌に罹らないという保証はありません。人間の肉体はいつ朽ちるか分かりません。そういう場合に、死に打ち克つための力はどこにあるか。この福音にあります。我々は、神の子とせられ、永遠の生命を与えられて、復活に日々天国に近づきつつあります。私の歌は、次のようなもの。

主イエスと 呼びてはげまん 今日もまた

手に来るわざを み国めあてに

この歌に立つ時、我々は恐れるものがなくなります。そういうことをキリスト教は説いています。